

ページの量に圧倒され  
読み始めるのをためらっている方へ。

登場人物たちのセリフの奔流に吞まれ  
あやうく読むのを挫折しかけている方へ。

実は1ページも読んだことはないけれど  
ちょっとだけ中身や雰囲気を知りたいという方へ。

あるいは、  
宗教、恋愛、虐待、父親殺し、  
数え切れないほどのテーマが  
魅力的なキャラクターたちを介して語られる  
この長編小説をこよなく愛し、  
もういちどあの感動を味わいたいと思っている方へ。

\*

血をめぐる争いを生々しく浮かび上がらせるプロコフィエフ、  
「大審問官」の世界観そのもののようなストラヴィンスキー、  
ロシアの大地の優しい息吹を感じさせるカリンニコフ。

『**カラマーゾフの兄弟**』の舞台と同じ  
ロシアで生まれたクラシックの名曲たちは、  
この複雑な物語を  
メロディアスでダイナミックなドラマとして  
再演出してくれる。

# カラマーゾフの兄弟(ドストエフスキー) サウンド・イメージ・アルバム ～読書のためのクラシック名曲集

※ネタバレ注意！

このブックレットの本文は、ストーリーの核心には触れておりませんが、小説のあらすじに沿って進みますので、若干のネタバレ要素を含みます。小説未読の方はご注意ください。

イントロダクション

# 宗教

Tr. 1

## 伝承曲

### ロシアの晩禱のための聖歌 - 鐘

「信仰」はこの小説の中で最も大きなテーマのひとつである。『カラマーゾフの兄弟』の主人公、三男のアリョーシャは教会の見習い僧であり、次男のイワンは徹底した無神論者であるが、このテーマに深くかかわるキャラクターは彼らふたりだけではない。欲望の権化である父親フョードル、放蕩に明け暮れる長男、ほか彼らカラマーゾフ家の人間をとりまく全ての登場人物たちが、一見そうとは見えない世俗的な生活の中で、幾度も幾度も、神や信仰をめぐる問答を繰り返す。夜が来るたび街じゅうに鳴り渡る、ロシア正教会の晩禱の鐘のように。

Tr. 2

## プロコフィエフ

### バレエ音楽「ロミオとジュリエット」Op. 64

### モンタギュー家とキャピュレット家

「カラマーゾフ的な血」——この小説にはしばしばそのような言葉が登場する。情欲と物欲にまみれた父親のもとに生まれた兄弟たちは、自分の肉体に心ならずも受け継がれたカラマーゾフ家の血のことを、あるときは吐き捨てるかのように自虐的に、またあるときは微かな自尊心をこめて語る。家と血をめぐる争いをドラマチックに描いた、プロコフィエフ（1891-1953）「ロミオとジュリエット」の中でも最も有名な「モンタギュー家とキャピュレット家」の音楽は、カラマーゾフ家の物語のBGMとしても打ってつけだろう。

# 血筋

第1篇

# 諧謔と饒舌

Tr. 3

リムスキー=コルサコフ  
歌劇「皇帝サルタンの物語」Op. 57  
くまんばちの飛行

Tr. 4

ショスタコーヴィチ  
交響曲第9番 変ホ長調 Op. 70  
第3楽章

ドストエフスキーの小説の大きな特徴は、セリフの長さである。登場人物たちは、ときに何ページ分にもわたって、まるで沈黙を恐れるかのように延々と喋りまくる。彼らは、シュールな皮肉をまじえ、難解な比喩を操り、さんざん読者を混乱させたかと思うと、次の瞬間、何のてらいもなくあけっぴろげに愛を語り始める。嘘と誇張と本音がごちゃまぜになって立ち現れる彼らの言葉は、ぶんぶんうなるくまんばちの羽音のように不快でもあるが、一方で、非常にミステリアスな魅惑にも満ちている。それは、諧謔的な音の戯れの中に巧みに己の本意を織り込んだ、ショスタコーヴィチ（1906-1975）の音楽にも非常によく似たものである。

## 第4篇

# 恋

カラマーゾフ家の兄弟たちは、老齡でありながら淫蕩に溺れる父親を間近に見て、この家の忌まわしいDNAに嫌悪と恐れを感じている。それにもかかわらず、若い彼らは、みな、自身の胸にたぎる恋情をおさえきれず、それぞれの愛する女性に心を投じていく。三男のアリョーシャの恋の相手は、「ロミオとジュリエット」のジュリエットと同年である——14歳の車椅子の少女リザヴェータ（リーズ）であった。彼女から可愛らしい愛の告白を受けたアリョーシャは、戸惑いつつもその気持ちを受け入れようとするが、このふたりの小さな恋物語は、その後、思いがけない展開を見せることとなる。

Tr. 5

プロコフィエフ

バレエ音楽「ロミオとジュリエット」 Op. 64

少女ジュリエット

カラマーゾフ家の下男スメルジャコフは、実に奇妙かつ強烈な印象を与えるキャラクターである。病的で陰気な雰囲気をもったこの癲癩持ちの青年は、一方で極度の潔癖性であり、ファッションや香水に異様に気を遣い、料理人としてすぐれたセンスを見せるが、誰にも心を開かず、なぜか次男のイワンだけを熱烈に慕っている。また、多才な彼は音楽のたしなみもあり、庭先でギターを弾いて女を喜ばせるシーンが登場する。オレクホフ（1935-1998）の「トロイカ変奏曲」は、ロシアの有名な民謡をもとに書かれたギターの作品である。

Tr. 6

オレクホフ  
トロイカ変奏曲

# ギターを持つ スメルジャコフ

第5篇

第5篇

# 大審問官

Tr. 7

ストラヴィンスキー  
詩篇交響曲  
第1楽章  
(第38篇 第13-14節)

『カラマーゾフの兄弟』の中で最も有名なシーンであり、この小説を読む上で避けては通れない大きな関門である「大審問官」。次男イワンが三男アリョーシャに語ってきかせる、この長大な劇中劇のBGMとしては、ストラヴィンスキーの「詩篇交響曲」がふさわしいだろう。この第1楽章は、詩篇第38篇からの引用を元にしており、ダビデが罪を犯した罰として心身を痛めつけられ、苦しみに悶えるくだりが生々しく描写されている。これは、イワンが「大審問官」の前置きとして語った、悲惨な児童虐待のエピソードをも彷彿とさせる。

次男イワンが創り上げた「大審問官」の劇中劇は、キリストから大審問官への無言の接吻でしめくられる。聞き手である三男アリョーシャにとって、「接吻」はこのときから大きな意味を持つモチーフとなる。彼は別れ際にイワンに接吻し、そして彼の師であるゾシマ長老の死後、大地にひざまづき接吻する。『カラマーゾフの兄弟』の全編中でもっとも美しい描写ともいわれる、この「大地への接吻」の場面にふさわしい音楽としては、チャイコフスキーの「聖金口イオアン聖体礼儀(聖ヨハネス・クリュソストムスの典礼)」を挙げたい。チャイコフスキーの他の有名作と比べるとあまり一般に知られることのないこの作品は、正教会のための奉神礼音楽であり、チャイコフスキーの埋葬式においても歌われている。

Tr. 8

チャイコフスキー  
聖金口イオアン聖体礼儀  
(聖ヨハネス・クリュソストムスの典礼)  
Op. 41  
VII. ケルビムの歌

# 大審問官への接吻、 兄への接吻、 大地への接吻

第6/7篇

# 犯行

ムソルグスキー

組曲「展覧会の絵」(ブレイナーによる管弦楽編)

I. 小人

『カラマーゾフの兄弟』のストーリーは、この第8篇から大きく変貌する。ともすると読むのに苦勞を伴う、前半部における長々としたキャラクター紹介や宗教問答は、サスペンス劇の壮大な伏線となり、物語は一気に怒涛の展開へなだれこむ。この第8篇の幕開けの音楽としては、「展覧会の絵」の2曲目、おどろおどろしい雰囲気漂う「小人」がふさわしいだろう。作曲者のムソルグスキー(1839-1881)は、音楽史に名高い「ロシア五人組」のひとりであるが、ウォッカに溺れ、その生涯は幸福なものではなかった。彼の代表作である「展覧会の絵」(原曲はピアノ曲)は、『カラマーゾフの兄弟』と同じく、1870年代に書かれた作品である。

長男のミーチャは、第8篇における事実上の主人公である。彼は怒り、奔走し、とある事件を経て血まみれになり、金をまきちらして豪遊し、どんちゃん騒ぎを繰り広げ、最愛の女性グルーシェニカに気持ちを打ち明ける。この一見すると荒唐無稽としかいえない展開は、ミーチャの直情的な気質があってこそそのリアリティに満ちている。爆発的な民族調のリズムが多用されているハチャトゥリアン(1903-1978)の「ガイーヌ」、そして19世紀ロシアで大流行した情熱的な世俗歌である「黒い瞳」は、熱血漢ミーチャのイメージによく合うものといえるだろう。

Tr. 10

ハチャトゥリアン  
ガイーヌ組曲第1番

IV. アイシャとアルメン

Tr. 11

伝承曲  
黒い瞳

# 豪遊

第8篇



# 予審

Tr. 12

ショスタコーヴィチ

交響曲第8番 ハ短調 Op. 65 - 第3楽章

Tr. 13

ムソルグスキー

歌劇「ホヴァーンシチナ」

ゴリツィンの追放 (リムスキー=コルサコフ編)

つかの間の豪遊から一転、事件の犯人として疑いをかけられたミーチャは、検事らから予想外の質問を次々と浴びせられる。ショスタコーヴィチの「交響曲第8番」は、動揺するミーチャの心臓の鼓動が伝わってくるかのような予審のシーン、ムソルグスキーの歌劇「ホヴァーンシチナ」は、重苦しく悲壮感の漂う連行のシーンにふさわしいだろう。後者の歌劇は、17世紀ロシアにおける宗教と政治の対立をテーマとした史劇であり、この曲は、実在の人物であるヴァシリー・ゴリツィン公の追放の場面を描いている。

# 少年たち

カバレフスキー  
組曲「道化師」Op. 26  
I. プロローグ

この第9篇より、舞台は5ヶ月ほど飛んで11月となる。教会を去り、俗世に戻った三男アリョーシャは、地元の少年たちと交流を深めていく。少年たちは、一見して無邪気であるが、家族関係、友人関係、あるいは他のさまざまな人生の悩みを抱えている。中でもひととき早熟で自我の強い中学生のコーリャは、アリョーシャの関心を誘うため、自分は社会主義者であると宣言するが、逆に彼に笑われてしまう。社会主義に従順であったとされる作曲家カバレフスキーの「子供向け作品」である「道化師」は、コーリャの少年らしい頭でっかちな気質や微妙なコンプレックスを照らし出すかのような音楽である。

プロコフィエフ  
ワルツ組曲 Op. 110  
VI. 幸福 (シンデレラ)

三男アリョーシャに恋心を抱いていた車椅子のリーズは、かつては「大嫌い」と語っていた次男イワンに心変わりしてしまう。14歳の少女は、いまや乙女から小悪魔へと変貌し、その心には、不幸な子供が虐待される様子を見たいという奇妙な願望や、そんな自分自身に対する嫌悪の感情が巣食いはじめる。「ロミオとジュリエット」と同じ作曲者による「ワルツ組曲」は、苦しみ悶える少女のテーマ曲としてまさにふさわしい、可憐かつダークなテイストの舞曲である。

# 小悪魔

# 真相

ショスタコーヴィチ

交響曲第11番 ト短調 Op. 103 「1905年」

第2楽章 [抜粋]

次男イワンは、癲癇で倒れた病床のスメルジャコフを三回見舞うが、その過程で、兄ミーチャが逮捕された事件についての衝撃の真実を聞かされ、激しい動揺と狂気に陥る。スメルジャコフが嘘やはぐらかしを交えながら、徐々に事の真相を明かしていくスリリングなシーンには、ミーチャの予審のシーンと同じく、ショスタコーヴィチの音楽がふさわしいだろう。この交響曲は、1905年1月9日、ストライキ中の多数の労働者が軍隊によって殺害された実在の事件「血の日曜日」を題材にしており、当アルバムに収録されているのは、そのクライマックスにあたる大虐殺と民衆の死を描いたくだりである。

妄想にとりつかれた次男イワンは、悪魔の幻覚にいたぶられ、正気を失う。ラフマニノフ（1873-1943）ほか多くの作曲家がそのメロディを引用しているパガニーニは、19世紀前半に活躍したヴァイオリニストであり、あまりに人間離れした超絶技巧と痩せこけた病的な風貌から、「悪魔に魂を売った」と噂された人物である。ラフマニノフは、パガニーニの主題をヴァイオリンからピアノに移し、人を煙に巻くかのような高度で諧謔的なテクニックをふんだんに用いている。

ラフマニノフ

パガニーニの主題による狂詩曲 Op. 43

[抜粋]

# 悪魔との対話

# カラマーゾフ とは 何か？

ストーリーの終盤である第12篇では、長男ミーチャが逮捕された事件についての裁判の様子が描かれる。カラマーゾフ家の人々の来歴や性格、金や女を介して絡み合った複雑な人間模様が、裁判を通してあらためて浮き彫りにされる。そして、錯乱した次男イワンによる「みんな父親殺しのくせに」いう叫びによって、カラマーゾフ家の問題は、国や時代を超えた普遍的なテーゼとして読者の前に突きつけられる。殺された父親の亡霊が登場する「ハムレット」の一場面と、トラック2でも登場した「モンタギュー家とキャピュレット家」のブラスバンド版によるリフレイン——プロコフィエフ作曲によるこの2つの音楽が、第12篇の核心を浮き彫りにする。

Tr. 18

プロコフィエフ

ハムレット Op. 77

ハムレットの父親の亡霊

Tr. 19

プロコフィエフ

バレエ音楽「ロミオとジュリエット」Op. 64

モンタギュー家とキャピュレット家

(ギスケによるブラスバンド編)

ドストエフスキー最後の長編小説『カラマーゾフの兄弟』は、三男アリョーシャと若き少年たちを交えての、平和と祈りに満ちたシーンでもって締めくくられる。

「子供はなぜみじめなんだ」牢屋の中でそう嘆いた長男ミーチャ、児童虐待を受ける子供に深い憐れみを寄せた次男イワンらの想いもまた、このシーンにおいて潜在的に光を放っている。ロシア正教会の聖人イオアンを讃えるタネーエフの「聖イオアン・ダマスキン」は、信仰者アリョーシャが少年たちに囲まれるこのラストシーンの音楽としてふさわしい。作者ドストエフスキーもまた、人生の最後においては信仰の肯定者であった。

本アルバムをしめくくる1曲として、カリンニコフの「交響曲第1番」を収録した。ロシアの大地の息吹を伝えるような素朴で優しさに満ちた音楽を、映画のエンドロールのようにお楽しみいただければ幸いである。

Tr. 20

タネーエフ

聖イオアン・ダマスキン Op. 1

ラツパは鳴る時に

Tr. 21

カリンニコフ

交響曲第1番 ト短調

第2楽章

# 万歳、カラマーゾフ

エピローグ

**カラマーゾフの兄弟(ドストエフスキー)  
サウンド・イメージ・アルバム  
～読書のためのクラシック名曲集**

NAXOS  
2013年1月9日発売  
全21曲

発売・販売元:ナクソス・ジャパン

公式サイト:<http://naxos.jp>

Twitter: <https://twitter.com/naxosjapan>

Facebook: <http://www.facebook.com/NaxosJapan>